



夫が子連れでメダカ調査に参加。家族丸ごとお世話になり、子ども二人も田んぼ好き、生きもの好きに育っています。



# “愛すべき小さな田舎” からの小さなたより

第19回

## メダカ里親の会

星ふる学校「くまの木」(栃木県塩谷郡塩谷町)  
〔特定非営利活動法人 くまの木 里の暮らし〕

加納 麻紀子

### 東

京から栃木県塩谷町に移住して丸一〇年が過ぎた。「えー、まだ一〇年しか経っていないかっ

たっけ？」という声には、結構馴染んでるってことね  
と思、「あれ、もう一〇年もあるんだっけ？」とい  
う声には、いつまでもフレッシュってことだねと都  
合よくありがたく受け取っている。月並みだけれど、  
あつという間だったなあという気もすれば、いろいろ  
あつたなあと思うこともあり、要するにまだまだなと  
ころと、それなりになってきたところが混在している  
現時点である。これが一五年、二〇年と経過するうち  
に、変わっていくのだろうか、それとも案外こんな感  
じのままなのだろうか——自分のことながらなにか  
わくわくする。

わたしにくまの木の仕事を勧めてくれたのは、水辺  
生態系の保全に取り組むメダカ里親の会事務局局長の中  
荃元一さん。農業土木界限では水田魚道の設置支援や  
田んぼの生きもの調査の指導でご存知の方も多いので  
はないかと思う。メダカ里親の会の発足は一九九五年  
「農村に春の小川を復活させよう」を合言葉に、メダ  
カの飼育・増殖や生息地調査、その台帳づくりといっ  
た保全活動に取り組む中で、田んぼまわりの生きもの  
や農に関する啓発活動として「田んぼの学校」(農業  
農村の多面的機能を活用した環境教育)を企画された  
ことが、当時(社)農村環境整備センターで「田んぼの  
学校」を担当していたわたしとの出会いにつながる。  
一九九九年のことだ。同センターは「田んぼの学校」  
のコンセプトを提唱し、活動の推進・支援という看板  
を掲げたばかりであり、さらに担当のわたしは実のと



毎年「田んぼの学校」は、古代米(紫大黒、緑米)の田植えから。米作りは上三川町の有機稲作農家・上野長一さんが指導、支援されています。わたしが初めてのはこの田んぼです。



メダカ生息地台帳は、地道な情報収集と会員による現場確認により、更新が続けられ、県や市町の関係部署に報告されています。台帳に記載された生息地については2年に一度程度、現状調査が行われます。現在は、メダカの遺伝子情報も記載されています。

ころ農業のことも農村のこともまるで知らない二十代  
半ばの都会の女の子という状況だったので、宇都宮市  
平出町にあるフィールドに少し続けて通って現場を勉  
強させていただこうと、折々にお邪魔するようになって  
たのだった。

純粹な参加者でもなく、たいして作業を手伝えるわ  
けでもないわたしを中荃さんも、会長である宇都宮大  
学の水谷正一先生も、会員のみなさんもいつでもニコ  
ニコと受け入れてくださった。わたしは、子どもの遊  
びでいうところの「おまめ」(あるいは「おみそ」)の  
ように活動の場にいらせていただいた。





水田と水路・川のネットワークを修復する水田魚道。平成19年度に始まった農地・水・環境保全向上対策事業（現在の多面的機能支払交付金）の共同活動として設置されることが多く、会でその支援をしています。活動組織が主体的に設置・管理できるようなにかかわるのがこの会ならではの。

さまざまな表彰やお祝い事の折には、祝賀会なども。「おまめ」も声をかけていただきちゃっかり参加。会員に限らず、会にかかわる関係者が幅広く集います。役職や立場はさておいて和気あたたかい。



メダカ里親の会は、メダカの飼育・増殖や生息地調査を続けながら、県内各地でメダカが生息できる環境づくりを進めていった。開発地におけるメダカの救出と移動、メダカ生息地づくりや造成後の維持管理へのアドバイス、さらに、田んぼにおけるドジョウの繁殖に関する研究やメダカの系統保存のための遺伝子解析などの知見の蓄積……これだけでもかなりのボリュームだが、さらに年五〜六回を数える主催型の「田んぼの学校」、近隣の小学校などの農業体験・自然体験の受け入れ、県内の「田んぼの学校」ほかさまざまな関連団体の類似の取組みの支援、二〇〇四年には写真撮影も解説執筆もすべて会員が分担した図

鑑「田んぼまわりの生きもの、栃木県版」を自費出版で発行……。活動が盛んになり評価が高まると取材に視察にヒアリング、各種表彰などもたくさん受けることになる。ありがたいことではあるけれど、調整や対応は想像以上に大変だ。中茎さんをはじめ、メダカ里親の会の会員は、主に栃木県庁、栃木県土地改革事業団体連合会、市町村、土地改良区などの農業土木技術者などであり、これらの活動はもちろんお仕事の日だけでボランティアに行われているのである。すごい。それでいて、みなさん、変な気負いや過剰な使命感を帯びたところがなく実に自然体で楽しげなのだ。そんなふうにかかわれるようなさりげない仕掛けや若干のやさせ我慢ももちろんあると思う。だが、「おまめ」のわたしは、そんなみなさんの姿を拝見して、「田んぼの学校」などの地域の活動は、こういう方々とかかわっていくのだから、こちらも「仕事」だからやっています、ということでは表面をなぞるようにはしか理解できないという思いを強くした。わたしも楽しみながら全力で行くぞ、と腹を決め、よし、と前に進めた気がする。今思えば、この時点で塩谷移住に運命が少しずつ動き出していたのかもしれない。

実は今年で、メダカ里親の会の「田んぼの学校」は一区切りとなった。休耕田を池にして、メダカの学校と称していた「田んぼの学校」のメインフィールドは、木道や遮水シートが撤去され再び田んぼに戻った。通年で農作業や生きもの観察などを行う「田んぼの学校」はいったん終了だ。時が経つにつれ会員のライフステージも移り変わり、これまでと同じようにメンバー



「田んぼの学校」の活動のときも、調査や作業のときも参加者の集合写真を撮るのが恒例です。みんないい表情、だいたい中茎さんが一番いいお顔です。（前列左：水谷先生、右から二人目：中茎さん）

を確保して環境管理や行事運営を行っていくことは難しいという判断だという。会や活動がなくなるわけではなく、現在の会の人材とノウハウを生かしてより直接的な水辺生態系の保全に注力していくとのこと。この方向転換にさみしさは感じない。さすがだな、と思う。メダカ里親の会に育てられた活動や人材は各地に広がっている。「おまめ」のわたしもその一人とひそかに自負している。

メダカ里親の会、発足から二五年、誌面を借りて恐縮だが、ここに心からのお祝いと敬意と最大級の感謝を表します。

写真は中茎さんに提供していただきました。記してお礼を申し上げます。



田んぼに戻すメダカ池の植物の除去なども何回かに分けて会員の手で。これは今年6月の作業時の集合写真。